

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：28001

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24652038

研究課題名(和文) 戦前の沖縄本島・八重山諸島・台湾のラジオ音楽番組における洋楽受容と郷土意識の形成

研究課題名(英文) The growing process of cultural identities among Japanese people living in Okinawa Prefecture and colonial Taiwan; through the influence of some radio programs broadcasted in modern Japan.

研究代表者

三島 わかな (MISHIMA, Wakana)

沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員

研究者番号：60622579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)： 沖縄県内の聴取の実態を明らかにした。1935年以降に受信機が普及した背景には、安定価格で高性能の受信機の供給があった。この時期、小学校では受信機の設置が顕著で、とくに離島では南洋・台湾・関西へ移住した卒業生からの創立記念品として寄附された。

1930年代のネットワーク化を背景に各中央放送局が当地を題材とした番組を制作し、台湾放送協会も同様の流れにあった。地域の人材および地域の文化を発掘・振興したという点で放送局は一大拠点と言える。主要コンテンツ「子供の時間」に着目し、児童劇脚本の分析を行なった。そこでは内地・外地ともに地域の伝統が題材となり、唱歌や国民歌謡等の多様な楽種が放送劇で使用された。

研究成果の概要(英文)： I revealed how people listened to radio programs in Okinawa prefecture. It was noted that radio receivers were donated as gifts for the schools establishment anniversary by former students who moved to the South Pacific, Taiwan, and Kansai areas. Through constructing radio wave networks in the 1930's, each central broadcasting station created radio programs related to local subjects, this was the same for broadcasting associations in Taiwan as well. The broadcasting stations played a major foothold in disseminating and promoting regional human resources and culture. For example, "Kodomo No Jikan", one of the major programs, created traditional local materials including Ryukyu and Taiwan folklore and so on, into the style of radio drama for children. Various traditional songs were also used in these radio dramas. It was pointed out that songs from both genres of Shoka and Kokumin Kayo were used more in these radio dramas.

研究分野：音楽学

キーワード：ラジオ放送 受信環境 ネットワーク化 標準化 ローカルティ 伝統性 アイデンティティ 在台沖縄出身者

### 1. 研究開始当初の背景

ここではメディア文化論に直接あるいは間接的にかかわる研究領域の動向を概略したい。

まず、洋楽受容史の研究領域では、近代学校教育における唱歌教育や音楽会等の「直接的受容」については相当の研究蓄積があった。ところが同研究領域では、メディア(レコードやラジオ等)を介した「間接的受容」への関心がさほど高くなく、洋楽受容史におけるメディアへの注目は後発的なものだった。そういった状況であっても、近代日本のラジオ放送に関する研究がわずかにみられたが、それらの研究も東京中心の視座にもとづき、内地の地方都市や沖縄あるいは外地(台湾)へ着眼した研究は皆無だったと言える。

つぎに、沖縄のラジオ放送に関する研究領域では一程度の研究蓄積をみていたものの、それらは時期的に戦後を対象としたものであり、その着眼点は放送の制度史や機構変遷等のハード面に注がれ、あわせて米軍の占領地政策という文脈のもと描かれたものが大半だった。つまり当該研究領域では、戦前への視点を殆んど持ち得ず、しかも戦後の展開を描くうえでソフト面(放送文化の内容・コンテンツ)に関しては解明され得ずにいた。

### 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、次の四点である。

- (1) 近代日本の枠組みの中で「周縁」と位置づけられてきた沖縄県(沖縄本島、八重山諸島)および台湾を対象地域として、戦前のラジオ放送の「発信」と「聴取」の様態を明らかにすること。
- (2) ラジオ番組の内容(コンテンツ)の分析を通じて、洋楽や郷土の音楽の「大衆化」のプロセスについて明らかにすること。
- (3) (1)で列挙した対象三地域(沖縄本島、八重山諸島、台湾)での聴取の様態を比較的に検証すること。
- (4) 文化創造の拠点としてのラジオ放送が、近代日本人のアイデンティティをいかに表象したのかについて考察を深めること。

### 3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は、次の四つの手法による。

- (1) おもに対象地域で発刊された新聞を基礎史料として、紙上に掲載されたラジオ欄および周辺記事を収集し、放送内容(コンテンツ)に関するデータベースを構築する。
- (2) おもに対象地域で刊行された自治体史や学校記念誌さらには回想録などの二次的資料を収集し、並行して戦前のラジオ放送の体験者へのインタビューを実施する。そこからラジオ放送の聴取者層の実態把握や聴取者の反響に関する

るデータベースを構築する。

- (3) 上記(1)(2)の基礎的作業をふまえて、国内(沖縄含む)向け・東亜(沖縄および台湾含む)向け・沖縄独自・台湾独自の放送内容について比較分析をはかる。
- (4) 前述した三地域(沖縄本島、八重山諸島、台湾)の聴取の様子について比較分析をはかる。

### 4. 研究成果

研究代表者の一連の研究は次の特色をもつ。「地域」の観点でいえば、沖縄本島と八重山諸島ならびに台湾を対象とした。あわせて、これらの地域が受信した「放送波」の観点でいえば、熊本放送局の放送波を受信した年代(沖縄県および台湾)と、熊本放送局の放送波+外地連絡放送を受信した年代(台湾)、さらには東亜中継放送・東亜放送を受信した年代(沖縄県および台湾、中国大陸)に分けて考察した。

研究代表者の成果においては、これらの放送政策や放送システム面での特色を浮かびあがらせることへも意識を払いつつ、研究論文(計7件)、研究発表(6件)を行なった。

これらの具体的な内容については、次の四側面へのアプローチとして大別できる。

- (1) 沖縄県内で1930年代に受信された(JOGK熊本放送局放送波の受信期)コンテンツの解明。
- (2) 沖縄県内および台湾、中国大陸で1941年以降に受信された(東亜中継放送、東亜放送の受信期)コンテンツの解明。
- (3) 台北放送局(台湾放送協会)制作の番組内容の解明。
- (4) 沖縄県内での聴取実態の解明。  
沖縄本島の都市部(那覇市、首里市)八重山諸島(石垣島、西表島、与那国島、竹富島)  
沖縄本島周辺の離島(座間味島、久米島、粟国島、屋我地島、宮城島、南大東島、北大東島)

前掲(1)のアプローチでは、内地の全県を対象に、ご当地色を発揮したシリーズ番組「府県めぐり」に着目し、同番組の構成・内容を分析した。当該番組は各県単位で構成されているものの、番組内容の分析を通じて、この番組が必ずしも県単位ではなく旧国単位でご当地の文化を扱っていることがわかった。

したがってこの番組は、聴取者に対して二種類のアイデンティティ形成をはかるための一助となったと推察される。すなわち、近代以降の行政区分にもとづいた「都・府・県意識」を育むことと同時に、近世に由来する「旧国意識」の再確認と強化を、当該番組が果たしたことを指摘した。そのなかで沖縄県の放送回は異色を放った。それというのも当

時は内地であっても、近世琉球として存在した沖縄県の放送回では、他の都道府県とは異なる宮廷文化を保有していることが強調された。そういった歴史性を、当該番組の放送を通じて、沖縄県民そして日本国民全体が再確認するに至ったことによる。

前掲(2)のアプローチでは、日本政府が東亜建設構想を積極的に進めた年代を対象として、沖縄県そして台湾全土ひいては廈門（中国大陸）でどのような番組が受信・発信されたのかを明らかにした。だが今回、対象となる東亜放送（東亜中継放送）のすべての年代の悉皆調査には至ることができず、一部の時期（1943年11月～1944年2月）の解明にとどまった。

東亜放送には第一放送と第二放送とがあり、第一放送は東亜各地の放送局から現地語で放送され、第二放送は日本語による東亜各地の在留邦人向けの放送だった。今回はおもに、第二放送の音楽番組を対象としてコンテンツ分析をはかった。

その結果、戦時下だからこそ、番組編成面で音楽番組がこれまで以上に比重を高めたこと、そして多様な楽種（新作曲、日本の各種演芸、日本の伝統芸能、西洋芸術音楽）が共存する放送文化のレイアウトが作りだされたことがわかった。東亜放送網下にあった廈門放送局の第二放送を一例とするならば、そこではご当地の中華民国由来の楽種は一切放送されなかった。つまり廈門の第二放送では、東亜の文化を統合する政策下にはなかったことになる。言い換えれば、日本国内を離れて中国大陸で生活する日本人の健全娯楽の充実を目的とした放送だったと言える。そのなかで最も需要された楽種は新作曲であり、そこから、当時のラジオ放送が邦人による新作曲の「大量消費」をうながしたことを指摘した。

さらにこの時期、生演奏ではなく簡便なレコード音楽がより一層活用され、ことに前線でもあった東亜各地の放送局からの音楽番組は、レコードがあったからこそ可能だったと推察される。その意味において、レコード産業界と放送業界は新しい日本の音楽文化をかたちづくるうえで密接にかかわり、「大衆」を意識した「新種の国産音楽」を生み出す原動力だったことを指摘した。

前掲(3)のアプローチでは、台北放送局制作の「子供の時間」に注目し、台北市をとりまくコンテキスト研究（同市内の児童文化団体と台北放送局とのかわりの解明）をはかり、さらにテキスト研究（台北放送局から放送された放送劇の脚本分析）をはかった。そういう研究手法のもと、「子供の時間」という番組の総合的（内地および外地台湾での制作上の特色や相違）な解明につとめ、この番組で放送された放送劇の脚本（沖縄県出身者による原作・脚色）内での音や音楽の意義に

ついて考察した。

コンテキストの面で明らかとなったことは、「子供の時間」の番組づくりが台北市内に数多く存在した児童文化団体の出演・原作・脚色によって支えられ、そのことは見方を変えれば「子供の時間」という番組枠が同市内の児童文化団体の重要な活動基盤となっていたことである。またこの時期、台北市内の児童文化の諸団体を束ねる「台北児童芸術協会」が結成されたことも、放送局と児童文化諸団体との連絡を密にしたと推察される。そのように推察した理由は、「台北児童芸術協会」の会員には台北放送局の職員が含まれていたこと、そして「子供の時間」で放送された主要な脚本家と放送局員との密接な繋がりも「台北児童芸術協会」という場を通じて促進されたと考えられるからである。

これら個々に解明された事象を繋ぎ合わせて考えるならば、台北市内の地域の一般の人々（児童文化団体、小学校や公学校、音楽団体など）が当該番組に出演することによって、各地の放送局による独自の番組制作が成り立っていたことになる。

テキスト研究としては、当該番組で放送された児童劇の脚本の様式分析をはかった。脚本の構成要素のなかでも、とくに音声や音楽（ナレーション、台詞、効果音、楽曲）の扱い方に注目した。その結果、使用楽曲の傾向として、ラジオ音楽番組「国民歌謡」で放送された新作曲（大衆音楽）をはじめ、軍歌の楽曲の使用など、近代以降に成立した楽曲の多用が認められた。だが、これらの楽曲傾向は、個々の脚本の物語性によって、ある程度規定されるのではないかと考えられる。また個々の脚本の時代設定や舞台となった場所は多様であり、そこには歴史的なもの（日本の偉人伝や逸話、琉球の偉人や伝説）から現代の設定まで含まれた。だが、これらの脚本が説いた内容には、ある程度の共通性（立身出世、親孝行、忠誠心、勤勉、森林愛護など）が見られることを指摘した。

前掲(4)のアプローチでは行政区分上の「沖縄県」を対象として、聴取の実態解明（ラジオ受信機の設置の様子、ラジオ放送の聴取内容）に努めた。ここでは沖縄県の地理的特色となる「島嶼性」に大きく注目し、島民生活とラジオ聴取のあり方を明らかにすることに留意した。ひとくちに「沖縄県」といっても、個人宅におけるラジオ受信機の普及率や公的施設における設置状況は、県内各地で格差（地域差）がみられた。そのため、県内を5ブロック（1.本島の都市部、2.八重山諸島、3.本島周辺離島、4.宮古諸島、5.都市部以外の本島）に分けて、ブロックごとに受信機設置の状況（設置場所、普及状況）および聴取内容の解明をはかった（ただし、4.宮古諸島、5.都市部以外の本島の状況については、本期間内での解明に間に合わなかった）。

これらの解明点について、ラジオ受信機の設置の様子について総括したい。沖縄県内全域に共通する動向として次の諸点を指摘した。まず、1930年代半ば以前に個人の家で受信機を保有したのは、一部の富裕層に限定されたことである。その後、1938年に日本放送協会が受信機の全国的な普及対策としてラジオ巡回相談や相談窓口の県下設置などの多角的サービスを実施し、加えて同年には「放送局型1号受信機」が一般に出回った。それ以来、標準装備の受信機が安定価格で全国的に供給されるようになった。それらを背景として、この年代以降は沖縄県内でも受信機が普及した。そのことは本島の都市部のみならず、本島周辺離島においてもタイムラグなく同様だった。あわせて1930年代半ば頃までには、ラジオ放送の有効性や必要性（文化的生活の構築、学校教育での活用、自然災害の回避）が、沖縄県民の世論レベルで唱えられていたことも明らかとなった。

県内にみられる地域的な格差としては、以下の諸点が認められた。まず、個人による受信機の所有で最も早い事例が、沖縄本島の都市部ではなく、与那国島（八重山諸島内）に確認された。その所有者の言説からも、隔離された離島だからこそ、情報源としてラジオ放送を重視していたことがわかった。あわせて県内最西端の与那国島においては、生活圏域として台湾東岸との繋がりが日常的なものだったので、ラジオ受信機の所有やラジオ放送の受信や聴取面においても、台湾からの影響が少なくなかったと推察される（ただし、本期間内ではその指摘にとどまり、さらなる解明については今後の課題として残された）。

次に、ラジオ塔（公衆用聴取施設）の設置については、人口の集中する沖縄本島の都市部（首里市、那覇市）に限って設置された。そのため都市部の実際の聴取者数については、聴取契約数には反映されない数も相当数あると見込まれる。

さらに、公的な場所におけるラジオ受信機の先取的な設置は各地の「小学校」に確認された。そのことは、とくに本島周辺の離島で顕著だった。県内の小学校の多くが1940年前後に創立四十周年や五十周年を迎え、この時期には学校設立記念事業が大規模に行なわれた。それらの記念事業の一環として、受信機の多くが寄贈・寄附された。とくに本島周辺の離島では、当時すでに島を離れて暮らす（南洋諸島、台湾、関西に在住）卒業生たちが、郷里の母校に受信機を寄附する事例が多く確認できた。

ラジオ放送の聴取内容に関する具体的な解明については（今回の期間内には思うような進展をみなかったが）、次のように総括できる。

沖縄県全域で広く聴取されたと考えられる番組は「ラジオ体操」「気象情報」「ニュース」等である。音楽番組に注目すると、台北放送局送山の番組「八重山民謡」を石垣島

（八重山諸島）の住民が聴取したことが判明した。1936年にスタートした番組「国民歌謡」についても、当時本島の都市部に居住したインフォーマントの証言から、その聴取が確認された。

以上、研究代表者の成果については、日本国内の研究者（メディア論、沖縄文化論、その他）が参考文献の一つとして取りあげている。

研究分担者の研究成果は、台湾のラジオ番組に特化した論文（計3件）である。1925年のラジオ試験放送時期ならびに、1932年に台南へ地方局が開局した時期について、主に当時の新聞に掲載された記事をもとに考察した。

研究成果をまとめると、台湾における音楽および芸能に関するラジオ番組の特徴は、次のように整理できる。一点目に、台湾のラジオ番組はその萌芽期から地元志向が強く見受けられること、二点目に、いわゆるアマチュア（愛好家）の出演が少なくないこと、また三点目として番組で取り上げる台湾の郷土音楽や芸能は必ずしも大衆の嗜好とは一致していないことが挙げられる。

一点目と二点目の特徴は、台湾の地理的/気象的事情が大きな要因であり、とくに夏場は雷電などによって内地からの放送受信が不安定であったために、地元で番組編成をせざるを得なかった。しかし、結果として在日日本人/台湾人（漢族系と原住民を含む）の音楽家や芸能家、芸妓、さらにアマチュアや児童生徒に至る幅広い層がラジオ番組に出演することにもつながったと考えられる。アマチュアの出演によって台湾のラジオから流れる音楽や芸能のクオリティが若干下がったかもしれないが、職業音楽家や芸能家に限らず、隣人や同級生など身近な人がラジオの電波に乗ることで、聴取者にとってラジオがより身近で憧れの舞台となったのではない。ただし、本研究期間内では当時の聴取者側の声を集めるに至っておらず、今後の課題とする。

また三点目の特徴は、当時大衆に最も人気の高かった歌仔戲や採茶戲が、ラジオではほとんど流れることがなかったことから確認できる。歌仔戲と採茶戲はともに中国大陆からの移民が伝えた芸能がベースとなっており、そのルーツに基づき前者は閩南語を、後者は客家語を用いる。マジョリティー言語の閩南語を用いる歌仔戲はとくに、20世紀初頭に台湾で成立後、大衆の間で瞬く間に人気を博すこととなった。同時代の主要な聴覚メディアであるレコードにも数多く吹き込まれ、広く流通した。しかし、方言を使用することに加えて、時として猥雑な内容を演じる歌仔戲や採茶戲は、風紀を乱すなどの理由で規制の対象となっていた。それが、ラジオで滅多に取り上げられることがなかった理由であろう。ラジオの送信側は台湾住民のラジオ

才聴取率を引き上げようと様々な努力を重ね、台湾音楽の一種である北管や南管あるいは北管戲や京劇をラジオ番組で取り上げたりもしたが、人口的マジョリティである一般的な台湾人が本当に求める音は政治的意図によって放送から排除されていたことが確認できた。

以上、研究分担者の成果については、近年の台湾内の研究者が参考文献の一つとして取り上げている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

### 三島わかな

近代沖縄でのラジオ放送の聴取-本島周辺の離島を対象に-、沖縄県立芸術大学紀要、査読有、第24号、2016、pp.15-28。

### 三島わかな

ラジオドラマと音楽-川平朝申の脚本集を事例に-、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第17号、2016、pp.45-57。

### 長嶺亮子

1932年の台湾におけるラジオ音楽番組の状況、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第17号、2016、pp.31-43。

### 三島わかな

近代八重山におけるラジオ放送の受信をめぐって-個人の邸宅から公衆の場へ-、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第16号、2015、pp.15-25。

[http://www.okigei.ac.jp/gakubu/ongakuga\\_kucourse08.html](http://www.okigei.ac.jp/gakubu/ongakuga_kucourse08.html)

### 三島わかな

地域を巻き込む放送文化-台北放送局「子供の時間」の放送童話を中心に-、沖縄県立芸術大学紀要、査読有、第23号、2015、pp.51-68。  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020487891>

### 三島わかな

戦前期沖縄でのラジオ放送-受信・聴取・発信をめぐって-、沖縄県立芸術大学紀要、査読有、第22号、2014、pp.1-17。

[http://ci.nii.ac.jp/eIs/110009879150.pdf?id=ART0010402411&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1460865709&cp=](http://ci.nii.ac.jp/eIs/110009879150.pdf?id=ART0010402411&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1460865709&cp=)

### 三島わかな

近代沖縄のラジオ放送に関する研究史概略-これからの研究の可能性-、沖縄芸術の科学 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要、査読無、第26号、2014、pp.85-111。

<http://www.ken.okigei.ac.jp/kiyou/vol27-vol25.html>

### 三島わかな

東亜放送廈門放送局 第二放送における音楽番組、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第14号、2013、pp.29-39。

[http://www.okigei.ac.jp/gakubu/ongakuga\\_kucourse08.html](http://www.okigei.ac.jp/gakubu/ongakuga_kucourse08.html)

### 長嶺亮子

1925年6月の台湾における芸能活動-始政三十年記念に関する新聞記事を中心に-、沖縄芸術の科学 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要、査読無、第25号、2013、pp.37-58。

<http://www.ken.okigei.ac.jp/kiyou/vol27-vol25.html>

### 長嶺亮子

日治時期始政三十年記念表演活動和廣播節目中的番組、閑渡音楽学刊、査読有、第18号、2013、pp.53-80。

[学会発表](計7件)

### 三島わかな

戦前のラジオに乗った音、ラジオ環境はどうだったの?-戦前の沖縄と台湾の放送-、東洋音楽学会沖縄支部第65回例会、2016年3月30日、沖縄県立博物館・美術館 講堂(沖縄:那覇)。

### 長嶺亮子

戦前のラジオに乗った音、ラジオ環境はどうだったの?-戦前の台湾の放送-、東洋音楽学会沖縄支部第65回例会、2016年3月30日、沖縄県立博物館・美術館 講堂(沖縄:那覇)。

### 三島わかな

公開講演会の企画・構成

「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」東洋音楽学会沖縄支部第65回例会、2016年3月30日、沖縄県立博物館・美術館 講堂(沖縄:那覇)。

### 三島わかな

地域の音楽文化の発信をめぐって-熊本中央放送局の放送プログラムを対象に-、東洋音楽学会第65回全国大会、2014年11月22日~2014年11月23日、四天王寺大学(大阪:羽曳野)。

<http://tog.a.la9.jp/meeting/2014/2014pro.pdf>

### 三島わかな

近代沖縄・洋楽受容の捉え方-拙著『近代沖縄の洋楽受容-伝統・創作・アイデンティティ』をめぐって、合同研究会:東アジアにおける近現代音楽文化の諸相、2014年2月27日、沖縄県立芸術大学(沖縄:那覇)。

三島わかな

戦前のラジオ放送にみる沖縄イメージ-1938  
~40年の番組を対象に、日本音楽学会第64  
回全国大会、2013年11月2日~2013年11  
月3日、慶応義塾大学(東京:三田)  
[http://musicology.hc.keio.ac.jp/msj-mit  
a2013/schedule\\_msj\\_mita2013.pdf#search=  
'%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%9F%B3%E6%A5%BD%E  
5%AD%A6%E4%BC%9A%E7%AC%AC64%E5%9B%9E%E5  
'](http://musicology.hc.keio.ac.jp/msj-mita2013/schedule_msj_mita2013.pdf#search='%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%9F%B3%E6%A5%BD%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E7%AC%AC64%E5%9B%9E%E5%85%A8%E5%9B%BD%E5%A4%A7%E4%BC%9A')

三島わかな

川平資料における放送関係資料-朝申脚本集  
を中心に、川平朝申研究会、2013年3月30  
日、沖縄県立芸術大学(沖縄:那覇)

(3)連携研究者  
なし ( )

研究者番号:

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三島 わかな (MISHIMA, Wakana)  
沖縄県立芸術大学・附属研究所・共同研究  
員  
研究者番号: 6 0 6 2 2 5 7 9

(2)研究分担者

大畑(長嶺)亮子 (OHATA/NAGAMINE, Ryoko)  
沖縄県立芸術大学・附属研究所・共同研究  
員  
研究者番号: 3 0 5 8 9 7 8 4